

転移性皮膚癌における超音波検査所見の検討

～悪性を疑い得なかった症例を経験して～

◎糸川 沙耶¹⁾、中島 佳那子¹⁾、井田 葉津季¹⁾、西村 はるか¹⁾、宇城 研悟¹⁾
松阪市民病院¹⁾

【はじめに】転移性皮膚癌の超音波検査所見は、一般的に不整形の低エコー腫瘤で内部エコー不均一、豊富な血流を認めるといわれているが、報告例としては少ない。今回超音波検査で悪性を疑い得なかった症例を経験したことから、転移性皮膚癌の特異的な所見について後方視的に検討したため報告する。【症例提示】70歳代女性。頬粘膜癌、口唇癌の既往あり。下口唇に圧痛と発赤を伴う硬結を認め、表皮囊肿や皮膚転移が疑われ超音波検査を施行。真皮内に不整形の低エコー域を認め、内部に豊富な血流を認めたが、周囲組織のエコー輝度の上昇と血流を認めたことから、悪性を疑うことができなかった。抗生剤にて加療後も硬結に変化がないため、皮膚生検施行し、口腔癌の皮膚転移と診断された。【対象と方法】2016年10月から2024年3月までの7年6か月間に当院にて体表超音波検査を施行し、病理組織診断にて転移性皮膚癌と判明した7結節（男性4名、女性3名、平均年齢75.3歳）を対象とし、超音波検査所見における大きさ、形状、境界、表面、内部エコー、血流、後方エコー、存

在部位について検討した。【結果】超音波検査所見では大きさが8～19mm、形状は類円形～楕円形を呈したものが5結節あった。境界は4結節が明瞭、表面は5結節が不整であったが、内部エコーはすべて不均一で、血流は少量から拍動性まで様々な血行動態を示した。後方エコーは一部減弱が1結節、残りの6結節は増強を呈していた。存在部位は真皮～皮下脂肪織までであった。【考察】形状、境界、表面において様々な所見を呈したのは、転移性皮膚癌が結節型、炎症型、硬化型に分類され、病型によって結節像が異なることが理由の一つとして考えられる。また原発巣や転移部位、経過年数などにより性状が異なり、様々な超音波像を呈するため、超音波検査では判断困難な場合も多いが、良悪性問わずそれぞれの特徴を理解し、性状を詳細に評価することが重要である。【まとめ】今回の検討で転移性皮膚癌の特徴的所見は明らかではなかったが、形状や内部血流などを注意深く観察し評価することで、超音波検査の有用性をさらに高める可能性があると考えられる。連絡先：0598-23-1515